

「温泉文化」ユネスコ登録への工程

高崎商科大学特任教授 熊倉 浩靖

はじめに—4つの基本課題

指宿大会で温泉文化の無形文化遺産登録が決議されて1年が経ちました。登録への熱意は高まっていますが、登録のためには4つの基本課題があります。

第1の課題は、世界の人々が納得する「日本固有の文化としての温泉文化」の定義づけです。「日本は温泉列島で温泉利用は日本人の社会的慣習」だけでは不十分です。温泉地の文化財を並べ立ててもだめです。日本人の温泉利用の方法が民族文化と呼びうる固有性を持っていることを証明する必要があります。

第2の課題は、「改めて保護しなければならぬ状況にある」ことの検証です。経済原理や通常行動で温泉文化の維持・発展が可能なら、ユ

ネスコ遺産事業による保護・育成は不要だからです。また、登録を申請する以上、温泉文化を危機にさらす状況を打開し「本来の温泉文化を、担い手と共に保護・育成する仕組み」の提案が求められています。

第3の課題は、「国内法での温泉文化の保護・育成」の確認・強化です。しかし現状では、日本固有の温泉文化は温泉法・文化財保護法の直接的な保護・育成の対象ではありません。

第4の課題は、「多様な賛同者を得ての国民運動」の構築です。温泉関係者だけの運動では不十分です。温泉文化は民族固有の文化であり、日本人は温泉文化の担い手であることの国民合意を形づくる活動が必要です。四つの基本課題を私なりに検

討してきた中間報告を示したいと思います。

定義へのキーワード①—入浴—

私たちにとって温泉はあまりにも当たり前の存在です。この当たり前の営みを客観視して海外の温泉利用との違いを鮮明にしていくことが「温泉文化」を定義づける一歩です。

海外の多くの地域では、バスタブに少なめの温水を張り、そこで全身を洗います。洗剤を使う場合はシャワーで洗い流します。温水のプールに入ることはありませんが、プールやバスタブに浸かり温まることは一般的な感覚です。プールに入るのはビーチ感覚です。サウナで汗をかくことで汚れを落とす形も

あります。

日本では、洗い場で洗い、かけ湯をしてから浴槽に浸かります。浴槽には手拭は無論、髪を入れることも泳ぐことも厳禁です。静かに浴槽に浸かって温まり温泉成分を沁み込ませることが基本です。温泉成分を洗い流すことはしません。

こう見てくると、「温泉文化」定義の第1のキーワードは、洗い場で汚れを落とし、かけ湯をして、静かに浴槽に入り、じっくりと浸かり、温まり、温泉成分を身に沁み込ませる「入浴」そのものにあることが理解されます。私たちには当たり前でも、海外では一般的ではありません。

定義へのキーワード②—浴槽—

入浴の場としての「浴槽」もキーワードとなります。私たちにとっての浴槽は「静かに浸かって温まり温泉成分を沁み込ませる」場所です。浴槽は温泉の力をいただく聖なる場所です。

浴槽を人々が共同利用するから、お湯も浴槽も、人々が使いながら清らかさを維持することが求められます。その作法が入浴前の洗い・かけ

お風呂でのエチケット12項目



- ①入浴前や後にも水分補給しましょう。入浴により体の水分が奪われます。
- ②飲酒後の入浴は控えてください。転倒や脱水を生じます。
- ③入浴時は下着や水着を脱いで入ってください。
- ④かけ湯を3〜5回してから入浴しましょう。血圧の急激な上昇を防ぎます。
- ⑤体を洗ってから浴槽に入浴しましょう。
- ⑥浴槽に飛び込まないでください。
- ⑦浴槽の中で体を洗わないでください。
- ⑧タオルを浴槽に入れないでください。浴槽の清潔を保つためです。
- ⑨浴槽の中で泳がないでください。
- ⑩浴槽内で衣服や下着を洗わないでください。
- ⑪脱衣室に入る前に身体をふいでください。
- ⑫エチケットを守って、温泉を楽しんでください。

定義へのキーワード③—湯治あるいは逗留—

温泉地での入浴が家の入浴と異なるのは、何回も何日も繰り返し浸かり温まることです。

一週間前後温泉地に逗留して温泉入浴を積み重ねます。日数をかけて聖なるお湯に浸かり温まることで生活や生業で疲れた心身を癒し回復させます。

こうしたかたちは「湯治」と呼ばれてきました。「治療」の「治」が入ることから温泉療法と理解する向きがありますが、もう少し広い意味での「癒し」と見て良いでしょう。そう考えた時、湯治あるいは逗留が物見遊山や地の食と一体であることの意味が浮かび上がってきます。癒しの力、温泉湧出の源は地域の風土にあるからです。温泉とともに風土の総力をいただきます。

この形は、日本固有のマツリの構造と見事に対応しています。

ケ（褌）と呼ばれる日々の生活・生業を積み重ねると、心身の疲れが溜まります。この状態をケガレ（褌枯れ）と言います。ケガレは汚れ

ではありません。ケ（褌）が枯れる、日常のエネルギーが枯渇したことを言います。ストレスが溜まり体は不調となります。

ケガレの状態を受け止め、清らかな力を招き入れるために身を清め慎みます。このことを古来イム（忌む）と言います。体を洗い、かけ湯をして浴槽に入る準備をし、静かにお湯

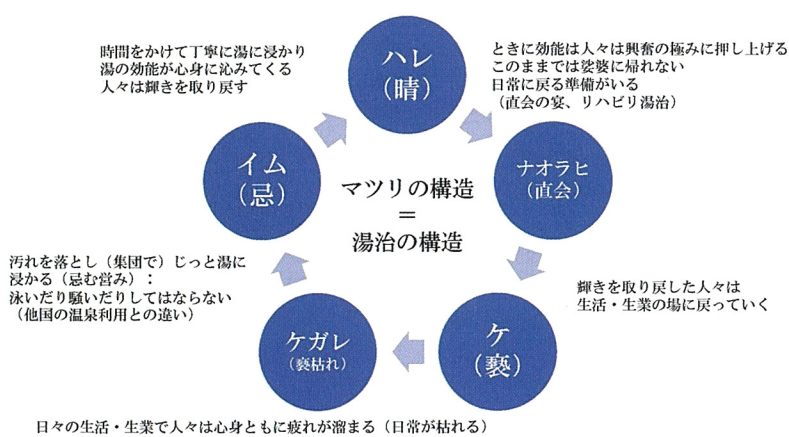


図1 温泉文化とマツリの構造

表1 日本と海外の入浴作法比較

	日本の温泉作法	海外諸地域の入浴作法
汚れを落とす場所	洗い場	バスタブかサウナ
かけ湯	必須	不要
浴槽（とそこでの作法）	静かに浸かって温まり、温泉成分を沁み込ませる 髪・手拭を入れること、泳ぐこと・騒ぐことは厳禁	洗い場かビーチ感覚のプール プールの場合、水着、泳ぎOK
肌に沁みだ温泉成分	温泉成分を洗い流さず水気を拭い浴衣で休む	一般的にはシャワーで洗い流す
家庭浴槽に入れるもの	湯の花か、それに似せた入浴剤	洗剤



に浸かります。

医学的には入浴による血圧急変の予防ですが、経験的につけ湯の重要性を伝えてきたのです。清らかさを守るためには騒ぐこと・泳ぐことは厳禁です。

清らかな湯が効能成分と温かさをもたらします。時間をかけて湯の効能が心身に沁み入ることで人々は癒され輝きを取り戻します。ハレ（晴れ）の段階です。

これだけでは興奮状態です。ケ（藝）つまり日々の生活・生業に戻る営みが必要です。様々な方法がありますが、一般的には共食です。古来、ナオラヒ（直会、ケにナオル）と呼ばれてきました。

定義へのキーワード④
―旅館（街）―

この形が温泉地を旅館街とし飲食の場とし物見遊山を浮かび上げられます。温泉と旅館が不可分の関係にあることの証拠があります。表の2と3です。

表2は、「にっぽんの温泉一〇〇選」2019年ベスト50の温泉を点数化し（1位50点、50位1点、都道府県ごとに集計して順位づけ）たも

のです。

トップ10道県を「温泉県」と呼ぶことに異論はないでしょう。10道県における旅館との関係性を調べてみましょう。非常に良い資料があります。観光庁が毎年発表している「都道府県別宿泊施設タイプ別客室稼働率」です。

旅館客室稼働率は平均値で約4割です。他の宿泊施設に比べて旅館客室稼働率が非常に低いことが分かります。「おもてなし」と括られる旅館特有のサービスが生み出す特質です。

その中でも、温泉県10道県の旅館客室稼働率（以下、稼働率）は高いことが分かります。例を挙げれば、稼働率2位の北海道は温泉県順位も2位、温泉県1位の群馬県は稼働率4位です。温泉県3位の大分県は稼働率7位です。

見えて来た定義づけ

まとめれば、日本の温泉文化は、清冽な水と火山が織り成す列島に暮らす人々が、生活・生業に疲れた心身を癒すために旅

館に逗留し、温泉入浴を繰り返して温かさと効能成分という清らかな力をいただき、地域の風土や歴史、飲食や芸能を楽しむことを通してケ（藝）を回復し生活・生業の場に戻っていく構造そのものを指すと言えますでしょう。そして、お湯と浴槽を共有するために、使いながら清める作法を作り上げてきました。その全体像が私たちに与った温泉文化です。そう考えれば温泉場の手拭や温泉を写した湯の花饅頭（温泉饅頭）は温泉の力を日常に持ち帰るお守りです。温泉場全体が寺社境内に匹敵します。

日本人が温泉好きなのは、温泉が日本文化の基本構造を実感させ日々の生活・生業を支え続けているからです。だから家庭においても温泉と同じ入浴方法を採り、入浴剤が必須となります。

定義づけに続く喫緊の作業

定義づけだけではユネスコ登録には至りません。少なくとも3つの作業に早急に取り組む必要があります。作業の第1は、温泉文化を広範な国民間の話題とすることです。個々の温泉や成分談義を超えて、

温泉文化としての情報提供、話題化に日本温泉協会ははじめ関係団体挙げて取り組まれることを期待します。作業の第2は、定義とユネスコ事業との整合性の確認及び国内法の検証です。

なかでも、「改めて保護しなければならぬ状況にある」ことの検証が強く求められています。温泉地の多くで観光入込客数や観光消費額は伸びながらも人口減少・少子高齢化・従業者激減が加速しています。温泉文化の担い手と温泉地存続の危機は深まっています。全国的検証を早めなければなりません。

作業の第3は、ユネスコ申請と国内法改正を当面の目標とした国民運動の組織化です。それぞれの地域において、行政や議会、多様な団体や人々に働きかけることが強く求められています。

「湯治」か「逗留」か

従来私は「湯治」を「温泉文化」定義の鍵と考えてきましたが、それは狭すぎるのではないかと自問しています。

「湯治」では温泉治療・自炊・長期滞在・秘湯のイメージが強すぎ

て、海外温泉療法との違い、かけ湯やお湯の共有に見られる入浴作法、旅館（街）の形成を説明できないのではないかと自問です。

そこで現在、「湯治あるいは逗留」という言葉を使い始めていますが、どちらがより適切なのか。特に、ユネスコ登録運動を通して「温泉文化」の見直し、育成を図る上でより有効なのかを皆さんと大いに意見交換したいと考えています。

温泉文化と自然免疫

コロナ禍は温泉地を訓練にさらしています。コロナが細菌ではなくウイルスのため効能議論では歯が立ちません。

弱ったなと思いついた矢先、7月2日付の朝日新聞デジタルに私たちが元気にしてくる記事がありました。

免疫学の世界的権威・大阪大学免疫学フロンティア研究センター招聘教授・宮坂昌之先生のインタビュー記事です。「新型コロナウイルスでは集団免疫はできない―免疫学者の警告」と題され「抗体に注目しすぎる議論はやめにして自然免疫をフル稼働させよう、そのためには、有酸素運動をしたり、毎晩お風呂に入って体温を

表2 「にっぽんの温泉100選」上位10道県（観光経済新聞、2019年発表）

	都道府県	点数	温泉名	
			温泉名	点数
1	群馬県	138	1位・草津、13位・伊香保、24位・万座、30位・四万、49位・みなかみ18湯	
2	北海道	97	7位・登別、21位・十勝川、35位・湯の川、44位・阿寒湖	
3	大分県	92	2位・別府八湯、8位・湯布院	
4	岐阜県	91	6位・下呂、19位・奥飛騨温泉郷、42位・飛騨高山、46位・長良川	
5	兵庫県	88	4位・有馬、10位・城崎	
6	石川県	71	12位・和倉、31位・山代、39位・山中	
7	鹿児島県	70	3位・指宿、29位・霧島	
8	栃木県	67	15位・鬼怒川・川治、20位・塩原	
8	長野県	67	28位・昼神、32位・白骨、34位・湯田中渋、43位・野沢	
10	宮城県	50	25位・秋保、27位・鳴子	

表3 温泉県順位と旅館客室稼働率

温泉県順位		客室全体		旅館		リゾートホテル		ビジネスホテル		シティホテル		簡易宿泊	
		稼働率	順位	稼働率	順位	稼働率	順位	稼働率	順位	稼働率	順位	稼働率	順位
	平均値	62.1		39.5		58.6		75.4		79.4		30.1	
1	群馬県	53.7	31	47.4	4	45.3	35	75.7	13	67.0	36	12.5	44
2	北海道	65.0	10	50.2	2	51.7	22	75.8	12	77.6	10	35.0	8
3	大分県	54.9	28	46.5	7	62.6	9	67.6	38	68.6	33	21.2	27
4	岐阜県	55.5	25	43.3	17	49.0	27	77.3	10	75.2	16	28.6	15
5	兵庫県	56.5	20	37.2	30	57.6	14	75.5	15	75.8	13	13.2	40
6	石川県	59.2	16	46.5	7	51.5	23	69.2	31	71.5	26	25.6	17
7	鹿児島県	56.1	23	38.1	28	48.0	32	74.3	19	71.5	26	23.4	21
8	栃木県	50.8	40	42.7	18	51.9	21	68.2	36	66.0	39	14.4	36
8	長野県	38.5	47	28.1	44	41.6	40	71.0	28	75.0	17	13.1	42
10	宮城県	57.5	19	41.5	21	51.1	24	65.3	45	62.1	46	29.6	14
11	山形県	51.7	35	39.2	26	31.4	47	69.3	30	68.9	31	11.6	46
12	愛媛県	55.9	24	49.4	3	61.3	11	65.8	44	72.8	21	14.9	33
13	神奈川県	70.7	5	51.4	1	67.1	6	83.4	2	84.6	3	52.7	2

上げたりして、血流をよくすること」とありました。そして規則正しい生活をして体内時計を狂わないうに、満遍なく、バランスのよい食事をしようとなりました。これに手洗いを加えれば、温泉文化の定義づけと見事に合うと思うのは我田引水でしょうか。

（なお、本稿の内容の多くは群馬県温泉協会会報にも掲載しました。）

新刊紹介
「日本」誕生

今号でもご紹介した当協会の「日本の温泉文化をユネスコ無形文化遺産登録へ」推進活動の顧問をお願いしている高崎商科大学特任教授の熊倉浩靖氏が「専門の日本古代史に関する新刊が発行されました。私たちの国「日本」はどのようになつたのか、東国に焦点を当てて日本列島全体を俯瞰した新しい歴史研究です。日本文化を語る上で必読の書。是非ご覧になってください。現代書館発行。定価2,700円＋税。

